

批判的实在論に基づくソーシャルワーク実践評価

—实在論的評価の応用（CIMO分析）とローカルなソーシャルワーク実践モデル—

○ 日本医療大学 氏名 丸山 正三 (00641)

キーワード：ソーシャルワーク実践評価・批判的实在論・实在論的評価

1. 研究目的

ソーシャルワーク実践がどの程度効果的であったかとの質問に答えることは、専門職のアカウンタビリティであり、その説明に根拠を与える活動がソーシャルワーク実践評価である。そして、ソーシャルワーク実践評価が科学的であることは妥当性の観点から求められる。

社会科学を基礎づける科学哲学には、伝統的に実証主義と解釈主義がある。ソーシャルワーク実践評価においては、実験的方法とシングル・システム・デザインなどの準実験的方法が紹介されてきた。しかし、これらの実証主義的な評価方法をソーシャルワーカーが現場の実践で活用することは極めて限定的であった。一方、解釈主義の立場は、構成主義やナラティブアプローチなど 1990年代頃からのソーシャルワークに大きく影響を与えてきた。ソーシャルワーク実践評価では、主観を含む実践過程を詳細に分析するケーススタディなどが解釈主義に基づいている。しかし、ケーススタディの弱点は、個別事例から得られた知識を一般化する視点が弱いことである。

科学哲学のもう一つの立場には、1970年代中頃に Bhaskar が提唱した批判的实在論がある。Bhaskar は、实在論の観点から人の認識によらない实在領域（domain）を認め、科学者の活動はその实在に迫る働きにあることを説明した。また、社会科学においては、人の存在に因果力を認め、抑圧的な社会構造に批判を向ける姿勢など、ソーシャルワークが大切にしている価値と親和性が認められる。そして近年、イギリス、ヨーロッパを中心に批判的实在論に基づくソーシャルワーク研究が増加してきている。

本研究の目的は、従来のソーシャルワーク実践評価の課題を乗り越えるため、批判的实在論に基づくソーシャルワーク実践評価について試論的に検討することである。

2. 研究の視点および方法

文献研究により、従来のソーシャルワーク実践評価の課題を整理する。批判的实在論が提示する科学哲学を明らかにし、ソーシャルワーク実践評価にどのように適用できるかを検討する。また、批判的实在論を基礎とした实在論的評価の応用的活用を検討する。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規定を遵守している。なお、本研究は人を対象とした調査・実験を伴わない理論的検討である。また、利益相反（COI）事項はない。

4. 研究結果

1) 従来ソーシャルワーク実践評価の課題

ソーシャルワーク実践評価が、実証主義に基づく場合、評価の妥当性の観点から客観的であることが求められ、その意味では評価の手続を厳密に行うことが必要とされる。しかし、この評価手続の厳密さはソーシャルワークの現場において、実践評価の実施を困難にした。また、対象との関係などソーシャルワーカーが実践場面で重視する主観的要素が排除されることから、ソーシャルワーク実践に適合しづらい面があった。

解釈主義に基づく場合は、ケーススタディとして活用されることも多く、クライアント理解やソーシャルワーク実践を振り返る上で意義が大きい。しかし、あくまで検討した事例の範囲での理解にとどまるため、一般化に限界があった。同様に、ケーススタディで学んだ知識が事例に埋没してしまう課題があった。

2) 批判的実在論に基づくソーシャルワーク実践評価とルーブリックの活用

批判的実在論では、解釈主義と異なり、個々の事例からも一般化できる知識があると考えられる。また、実証主義と異なり、現象の背景に因果関係となる構造やメカニズムがあると考えられる。そして、そのような構造やメカニズムを明らかにするために、アブダクションを積極的に活用する。ただし、アブダクションは論証力が弱く、提示した仮説が誤りである可能性は常にあるため、繰り返し検証を重ねるプロセスが重視される。

このような批判的実在論をソーシャルワーク実践評価に適用させるアイデアとして、教育現場でパフォーマンス評価に用いられるルーブリックの活用を想定した。ルーブリックは、学習者のパフォーマンスを生み出す能力を推定する評価基準として活用されているが、ソーシャルワーク実践評価として考える場合においては、能力に替わりソーシャルワークのねらい・価値の実現を推定する評価基準とすることが可能と思われた。

3) 実在論的評価の応用（CIMO分析）とソーシャルワーク実践モデル

批判的実在論を基礎理論としたプログラム評価の方法として実在論的評価がある。プログラムが有効に機能したのかは、プログラムが実施された状況（Context）に働くメカニズム（Mechanism）とその結果（Outcome）の分析から見ていく。分析結果は実施プログラムの評価と改善に活用され、また一連の分析プロセスはサイクルとして継続させる。

ソーシャルワーク実践では、プログラム評価と異なり、目に見える改善対象がないことが多い。そこで、現場のソーシャルワーク実践をローカルなソーシャルワーク実践モデルとして構築することで、改善の評価対象とすることを考えた。また、ソーシャルワーク実践（Intervention）を分析に加え、実在論的評価の応用としてCIMO分析を想定した。

5. 考察

批判的実在論は、実証主義と解釈主義の課題を乗り越える科学哲学として期待され、ソーシャルワークとの適合も考えられる。しかし、批判的実在論に基づくソーシャルワーク実践評価方法は未開発のため、本研究では開発に向けての試論的な検討が行えたと思う。